



少数精鋭。勝利への思いを熱く、総力発揮を「旗」に描くハンドボール部(和泉キャンパス・コート)

第35回 ハンドボール部

紫紺の勇者たち

Heroes of the Meiji.

—明大体育会の系譜—

文／沢柳 納
写真提供／明大スポーツ新聞・ハンドボール部

新春に優勝期す「七人の侍」 勝利への気迫と温度を高める

「旗は自分たちであげる」。松本勇ハンドボール部監督(77年卒)は部員にこう言ってきた。

旗幟鮮明。そう、明確な部の目標を掲げ、チーム、そして部員各自が何をすべきかを考え、実行する…。

インカレ閉幕後の12月、来年度キャプテンに選任された堤由貴(経営3)は新たな「旗」をあげた。

「ひたむきで、基本に忠実なプレーを大切に。そして、スターティングメンバーもオフ(控え)の選手も、全員が同じ気持ちで勝利をめざす。勝ちへの気迫を高め、部員間の温度差をなくしたい」とキツパリ。いわば部員総力戦。エース頼みを排する。いつでも試合に出られるよう自己管理する。全員が同じ熱気でボールに食らいつく。

最終目標は春秋の関東大学リーグと11月のインカレ「優勝」。新キャプテンはそのため、技術面はともかく、勝ちに向かうマインド強化を「旗」にかかげた。

2013年度は、池辺大貴(政経

4)が大黒柱のような活躍をした。その結果、「池辺頼み」が総力発揮の見えざるプレーキになった。新主将・堤がチームの総力アップを旗に掲げるのには、そうしたエース頼みからの脱却もある。

13年度の主な戦績はリーグ春秋5位、インカレは2回戦敗退。いずれも宿敵・日体大に敗れた。「日体大戦勝利が一課題」(原田季和コーチ)だっただけに悔し涙がないわけでもない。優勝校との実力は僅差。常に1部リーグで上位をキープして、「優勝を狙える存在」(加藤良典コーチ)だけにその分、新年度への期待は少なくない。

ハンドボールで人生開花

創部は1938(昭和13)年。ハンドボール大学リーグ発足に及んでバスケットボールの部外活動として始動。その後、同好会として活躍し41年に「送球部」として体育会に加盟する。戦後は1959(昭和34)



大倉学部長。後方支援で1部定着を支える縁の下の力持ち



松本勇監督。「明治は最近、実力校として高校でも高評価」



安田祥樹主将。「14年間のハンドボール経験は実社会への自信に…」



インカレ日体大戦で活躍する小澤亮太（経営4）



14年度新主将の堤由貴。「基本を大切にプレーを」



シュートを放つ大黒柱の池辺大貴（関東学生秋季リーグ）

土・日曜も厳しく、優しく

2人の「松本」前・現監督体制になってから1部定着。これには選手確保など大倉学部長（経営学部教授）の後方支援も大きな力になっている。「部長を拜命して初めてルールブック

80年代も危機的状況が続き、リーグ3部降格も。一時期、1部復帰もあったが2000年春季までは2部に甘んじていた。

7人に。1人でも欠けたら試合が成立しない。それでもリーグ1部校としてインカレでは京産大を一蹴した。このときの「七人の侍」はすでに伝説的に。前監督の松本隆栄（76年卒、明大理事）、現監督の松本勇もこの一員だった。メンバーはいずれも後進の指導に。ピンチはチャンス。ハンドボールは7人の人生開花に大きな影響を与えることになる。

年春季リーグで優勝するなどトップクラスとして不動の地位を築いた。ところが70年代に入り、入学難で危機的状況を迎えることになる。70年の部員は9人。ハンドボールは7人編成。これでは練習試合もできない。まさにボールが手につかない状況に陥る。さらに75年は最少人員の

ユニフォームに「感謝」

卒業は5人。新人も5人。部員23人の少数精鋭。13年のユニフォームは袖に「感謝」の2文字が記されていた。「先輩や家族、多くの人に支えられハンドボールを続けてこられた。『感謝』の気持ちいっぱいプレーしました。4年生で話し合い、決めたことです。堤にバトンを渡す主将・安田祥樹（農4）は爽やかな表情で新春を迎えた。

（文中敬称略）

「部活動は人間形成の場。社会の縮図を4年間で実体験できる好機」「何事も中途半端は許さない」「優勝とは何か。これを体験させたい」、そして「自分たちで旗をあげる」とばかり、土・日曜は休日返上で和泉の練習コートで厳しく、優しく現役を見守る熱血漢だ。

「手をしました…」と話すのが、現在はハンドボールに熱狂する一人に。松本監督は中村荷役（現ナカムラ・ロジスティクス）で実業団監督経験もある名実ともに第一人者。08年にコーチ、10年から監督。原田コーチは実業団のチームメイトである。